授業研究の歴史

高等師範学校・女子高等師範学校の歴史

学制に始まる高等師範学校と附属小学校小史
―授業研究，学習指導法開発，教科書改訂―

筑波大学教育開発国際協力研究センター　**礒田　正美**

はじめに小史を記し，算数教育上，興味深いエピソードを三話綴ることにする。

明治５年（1872）の学制に際し，お茶の水の湯島聖堂に師範学校（筑波大学創起）が創立し，師範学校附属小学校（筑波大附属小学校）が併設される。この学校は，その後，官立師範学校が新設される中で東京師範学校と名称変更する。地方に教員講習所／公立師範学校が創設される中，財政難に苦しむ明治政府は，東京師範学校と女子師範学校（1874創設）を除き，創立した官立師範学校を府県へ移管する。その後，女子師範は東京師範学校女子部に。明治19年の師範学校令により，東京師範学校は高等師範学校に改称。明治23年，女子部が分離され女子高等師範学校を創設（後のお茶の水女子大）。明治28年日清戦争講和（財政改善）。明治35年広島高等師範学校創設により高等師範学校は東京高等師範学校に改称。明治38年日露戦争講和（財政改善）。明治41年奈良女子高等師範学校創設により東京女子師範学校に改称。

我が国に限った話ではないが，18-20世紀初頭には，教育緒制度の充実・安定は戦争と無縁ではなかった。その後，第一次大戦特需と大正自由主義教育運動，大正８年日本数学教育学会創設（1919年）。大正12年（1923），関東大震災，昭和４年（1929年）大恐慌。再び困難な時代に入る中，２つの高等師範学校は東京文理科大学，広島文理科大学に昇格。逆に両高等師範学校（４年）は両文理科大学（３年）に付設。高等師範学校には，明治28年専修科（３年）が創設，それを基盤にした文理大法案は震災前年に貴族院を通過していた。

明治期，高等師範学校は，出版や教材開発なども行っており，国立科学博物館なども，東京高等師範学校の附属施設であった。

エピソード１　授業研究のはじまり

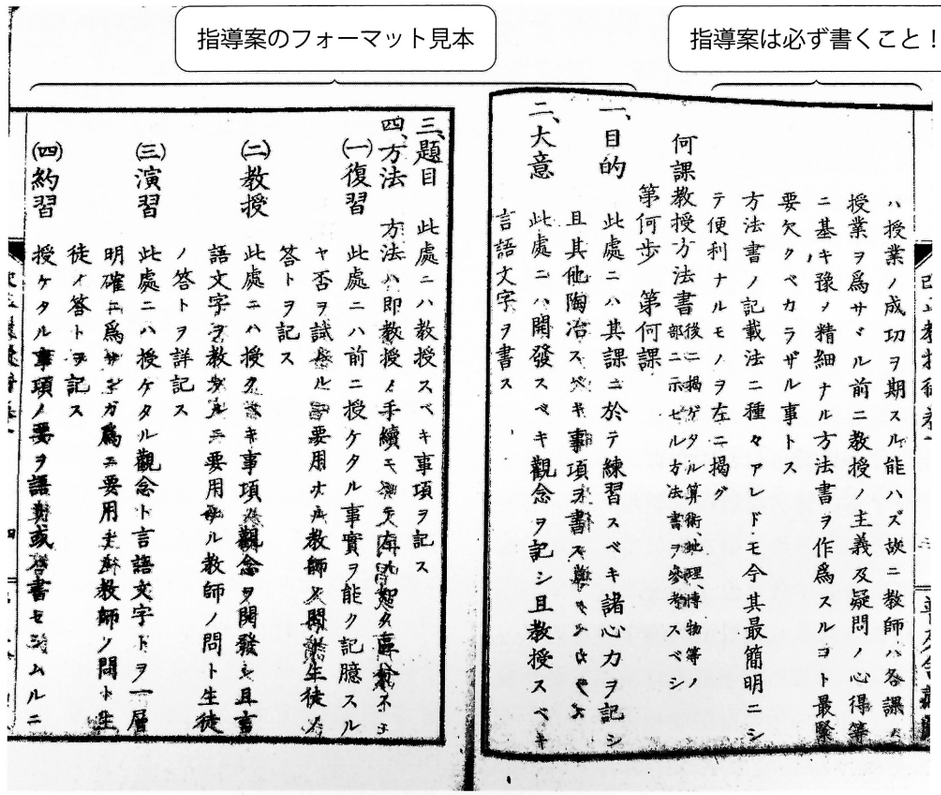
授業研究は，師範学校で始まる。それは最初の小学校教科書『小学算術書』（明治６年）を編纂し，当時最先端の黒板を利用した一斉指導を導入したM. M. スコット（1843-1920）の授業を参観し，その指導法を学ぶところからはじまったと言われている。実際，明治６年『小学教師心得』に次のように記されている。「授業中ハ教場ニ人ノ出入シルヲ禁ス可シ　但別段教場ヲ観ン事ヲ乞フ者ハ稽古ノ妨ケナキ様之ヲ許ス可シ」わずか14条の心得の中にある項目である。授業を参観するものが多かったことがわかる。

見本／今号には長崎栄三、中村享史の論説も収められています。

授業研究の歴史

指導案のフォーマット見本

指導案は必ず書くこと！



ハ授業ノ成功ヲ期スル能ハズ故ニ教師ハ各課ノ
授業ヲ爲サザル前ニ教授ノ主義及疑問ノ心得等
ニ基キ豫メ精細ナル方法書ヲ作爲スルヨト最緊
要ヲクベカラザル事トス
方法書ノ記載法ニ種々アレドモ今其最簡明ニシ
テ便利ナルモノヲ左ニ掲グ
何課教授方法書（後ニ掲ゲタル算術、地理、博物等ノ部ニ示セル方法書ヲ參考スベシ）
第何歩　第何課
一、目的　此處ニハ其課ニ於テ練習スベキ諸心力ヲ記シ且其他陶冶スベキ事項ヲ書キ擧ゲベシ
二、大意　此處ニハ開發スベキ觀念ヲ記シ且教授スベキ言語文字ヲ書ス
三、題目　此處ニハ教授スベキ事項ヲ記ス
四、方法　方法ハ即教授ノ手續モ測ヲ要ス
(一)復習　此處ニハ前ニ授ケタル事實ヲ能ク記憶スルヤ否ヲ試ミル爲要用ナル教師ノ問ヲ生徒ノ答トヲ記ス
(二)教授　此處ニハ授ケントスル事項ヲ觀念ヲ開發シ且言語文字ヲ教ヘル爲ニ要用ナル教師ノ問ト生徒ノ答トヲ詳記ス
(三)演習　此處ニハ授ケタル觀念ト言語文字トヲ一層明確ニ爲シ又ハ爲ニ要用ナル教師ノ問ト生徒ノ答トヲ記ス
(四)約習　授ケタル事項ノ要ヲ語數或ハ書セシムルニ

一斉指導，黒板，掛け軸利用にはじまる附属小学校の授業研究は，米国留学し帰国する高嶺秀夫（東京師範学校校長）等によるペスタロッチ教育運動の延長で，若林虎三郎・臼井毅『改正教授術』(明治16年：1883）において劇的に進展する。同書は文部省による福島県での講習会の講習内容をまとめたもので，当時の教員研修内容が読みとれる。そこでは例えば，指導法として，「疑問（発問）の心得」として，明白であること，主旨が明確であること，生徒に応じること，簡潔であること，論理的であること，答えを含まないこと……などが記された上で，上述のような指導案フォーマットが示されている（抜粋）。その後に，授業批評観点が４ページも記されている。すでに授業研究が存在した証である。各科毎の指導法は問答式で解説されている。指導過程を問答の抜粋でモデル化して記述する方法は，この時代にすでにあった。

エピソード２　『教育研究』誌の創刊

明治期，雑誌はすでに出版されているが，明治以来，今日まで継続発行されている教育誌最古参の雑誌が教育研究である。明治37年４月の発刊では，理論と実践の調和をめざした発刊の辞が小泉又一初等教育研究会主観より，教育雑誌は幾多あるが分化していない雑誌ばかり，初等教育に特化した教育研究誌への期待の辞が沢柳政太郎文部省普通学務局長より，定員を増やした教育学担当教員と附属学校との共同への期待の辞が嘉納治五郎東京高等師範校長より寄せられている。

創刊号では，阿知波小三郎東京高等師範学校訓導兼教諭が，今日言うところの「数と計算」領域における統合の指導，例えば分数・小数の相互関係の指導などの重要性を提案している。理論から実践課題が語られている。

教育研究誌が今日継続している事実が，創刊の願いが実現したことを物語っている。

エピソード３　生活算術運動

大正自由主義教育運動は，ともすれば欧米の教育研究の翻案とみなされがちであるが，算数教育史上は，作問指導や生活算術など，今日の問題解決型の学習指導の原型となる指導法が，附属学校や私学関係者により広く草案された時代である。当時は黒表紙教科書が国定教科書であり，指導法を工夫する時代であった。例えば，奈良女子高等師範学校附属小学校の清水による作問実践の写真（大正13年：1924）は，今日と見まがう教室である。

このような生活算術運動は，関東大震災に始まる厳しい時代に突入しながらも，東京高等師範学校と附属小学校の先生方の手で，昭和９年から利用される緑表紙教科書へ具体化されていく。

実践から理論が生まれ，理論から実践が生まれる時代は，教育の改善・革新をめざした師範学校と附属学校の共同，そして共鳴する先生方による数々の挑戦によって到来した。

習學術算の頃の四尋

すでのるす價評を題問てい開を會表發らかれこでろこさたげ掲に面側び及面正の室教をのもたし書板を題問發自

見本／今号には長崎栄三、中村享史の論説も収められています。